報告資料

安里　進

１、正殿欄干親柱の獅子像の検討
２、大龍柱遺物の３Ｄ合成
３、小龍柱の胴体捻れの検討
４、玉座御床の「黄塗り」技法

・１～３は、首里城復元に向けた技術検討委員会の彩色彫刻作業チームの会議において、令和４年４月～令和５年３月にかけて報告してきた資料を整理したものである。個別に報告してきた資料のため用語の統一が十分でない。
・４の玉座御床の「黄塗り」技法については、2023 年３月４日の「新・琉球漆芸会議 2023」（浦添市美術館主催）で報告したレジュメを掲載した。これは、昨年３月の「第１回首里城復元に向けた技術検討委員会報告会」で報告した「漆塗装関係報告資料」に、皇帝扁額の「黄色塗り」情報を追加して要約したものである。

2、大龍柱遺物の３Ｄ合成

――欄干に連結した大龍柱背面のホゾ穴・無彫刻面の有無――

1）大龍柱遺物の３Ｄ合成の意義

・平成復元後、首里城跡正殿地区の発掘調査報告書が刊行されて、平成の大龍柱復元では利用されなかった新たな遺物の存在があきらかになった。
・また、沖縄県立博物館・美術館（以下「博美」）に古くから収蔵されながらも、平成復元には利用されなかった大龍柱残欠もある。
・これらの遺物には、大龍柱を理解するうえで新たな知見をもたらす重要な部位が含まれている。

・令和の大龍柱復元に向けた技術検討作業では、既知の遺物・残欠を含めて沖縄戦前まで存在した大龍柱（ここでは「戦前大龍柱」と呼ぶ）の３Ｄスキャンを実施した。
・遺物を３Ｄデータ化することで、これまで重量があって容易に遺物の観察や接合が困難だった遺物も、コンピュータ画面上でマルチ方向の観察や、博美と沖縄県埋蔵文化財センター（以下「埋文」）所蔵の遺物を接合して、全体像を観察できるようになった。

・３Ｄデータ化で得られた重要な知見は、大龍柱の向きをめぐる議論の争点となった大龍柱背面の遺物を確認したことである。
・ここでは、大龍柱の背面遺物の３Ｄ合成で判明した新たな知見について紹介する。

2）３Ｄデータ化した遺物

・今回、３Ｄデータ化した遺物は、事前の遺物観察で戦前大龍柱の部位であることが確認できた博美、埋文、琉球大学風樹館（以下「風樹館」）に収蔵されている 12 点のうち 11 点である（**図１**）。**図 1⑧**は遺物が確認できず３Ｄデータが作成できなかった。
・11 点の遺物のうち、平成復元で利用されなかった新たな遺物は、阿形の⑥⑦、吽形の⑪⑫である。
・特に、阿形⑦（Sa-博 4）は、大龍柱の背面に欄干と連結した痕跡（ホゾ穴や無彫刻面）の有無が確認できる重要遺物である。

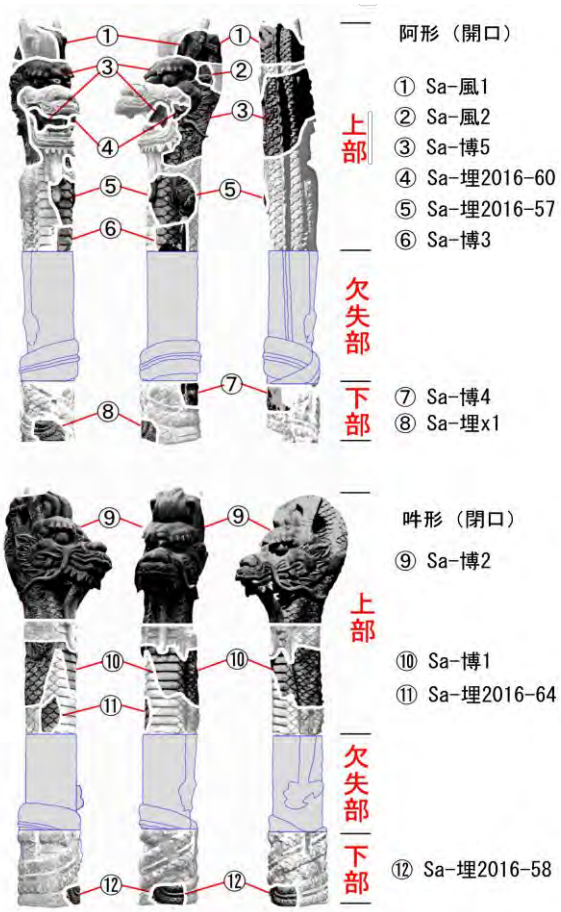

図１：３Ｄデータ化した遺物の部位
所蔵は、風(琉球大学風樹館)、博(沖縄県市立博物館･美術館)、埋(沖縄県埋蔵文化財センター)。

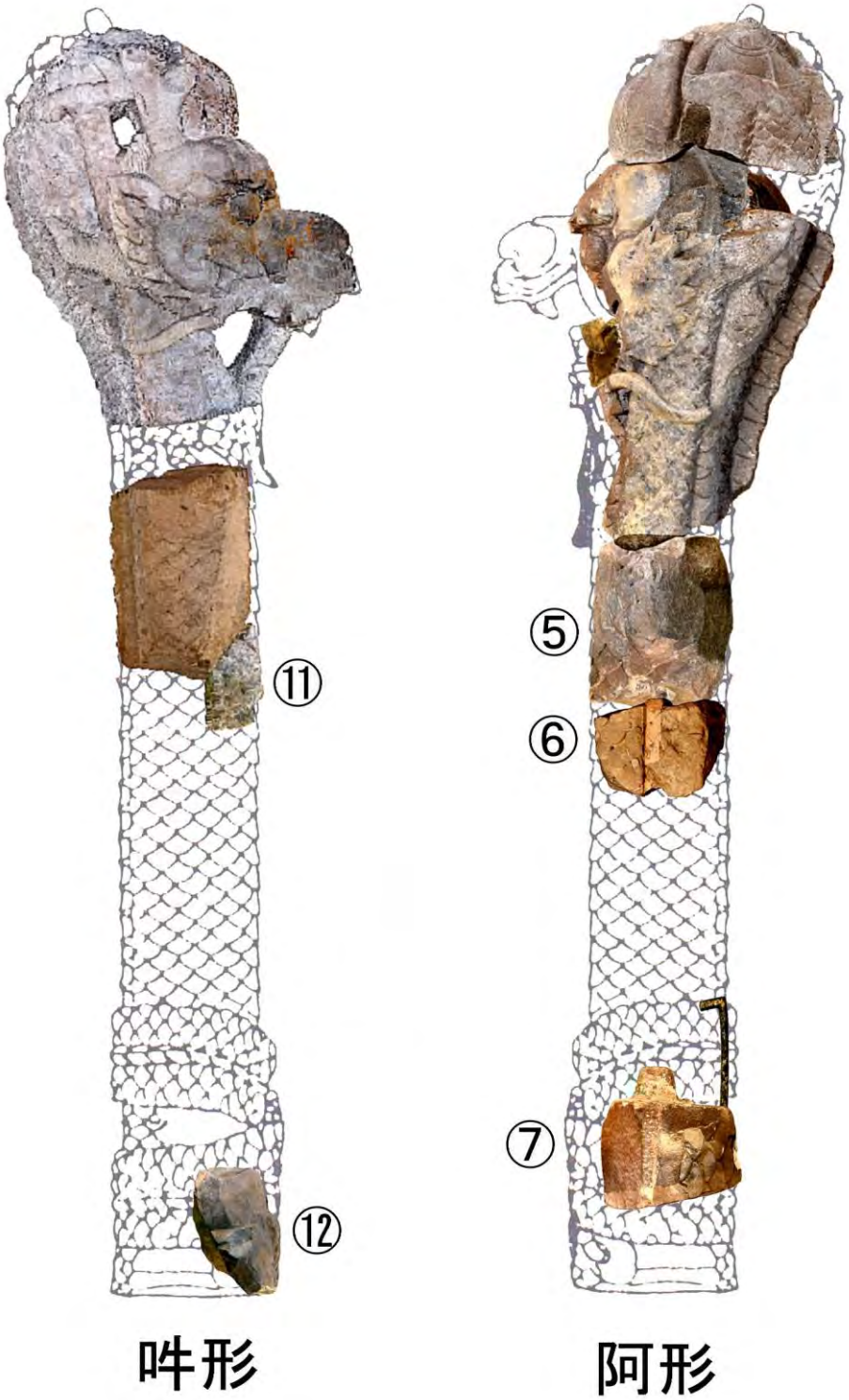

図２：遺物の３Ｄ合成全体図

⑥⑦⑪⑫は平成復元で利用されなかった新たな遺物である。

3）阿形大龍柱のトグロ巻部の背面位置

・大龍柱は、明治期に胴体中央部分が切断除去されて胴体（上部）とトグロ巻部（下部）を接合した短縮形になった（**図4**）。

・さらに、昭和修理で大龍柱の向きを正面向きから向き合いに変えた際に、胴体(上部）とトグロ巻部(下部）の回転を 90 度ずらしている（**図3**）。理由は不明。

・その結果、昭和修理以後は、胴部の左側面にトグロ巻部の背面が位置したため、トグロ巻部の背面が御庭側に面することになった（**図4**）。

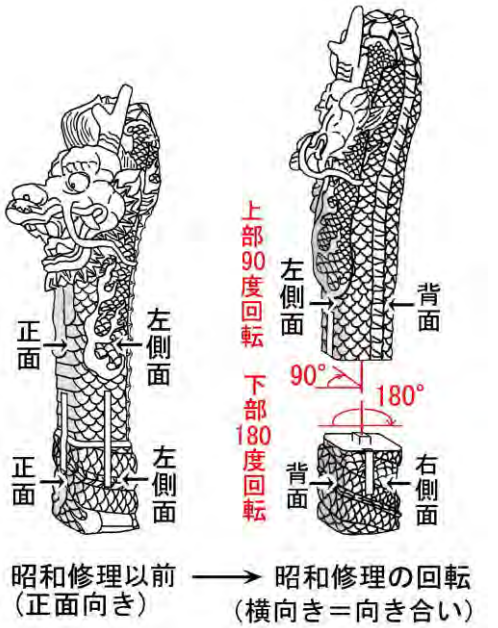

図3：昭和修理における大龍柱の回転

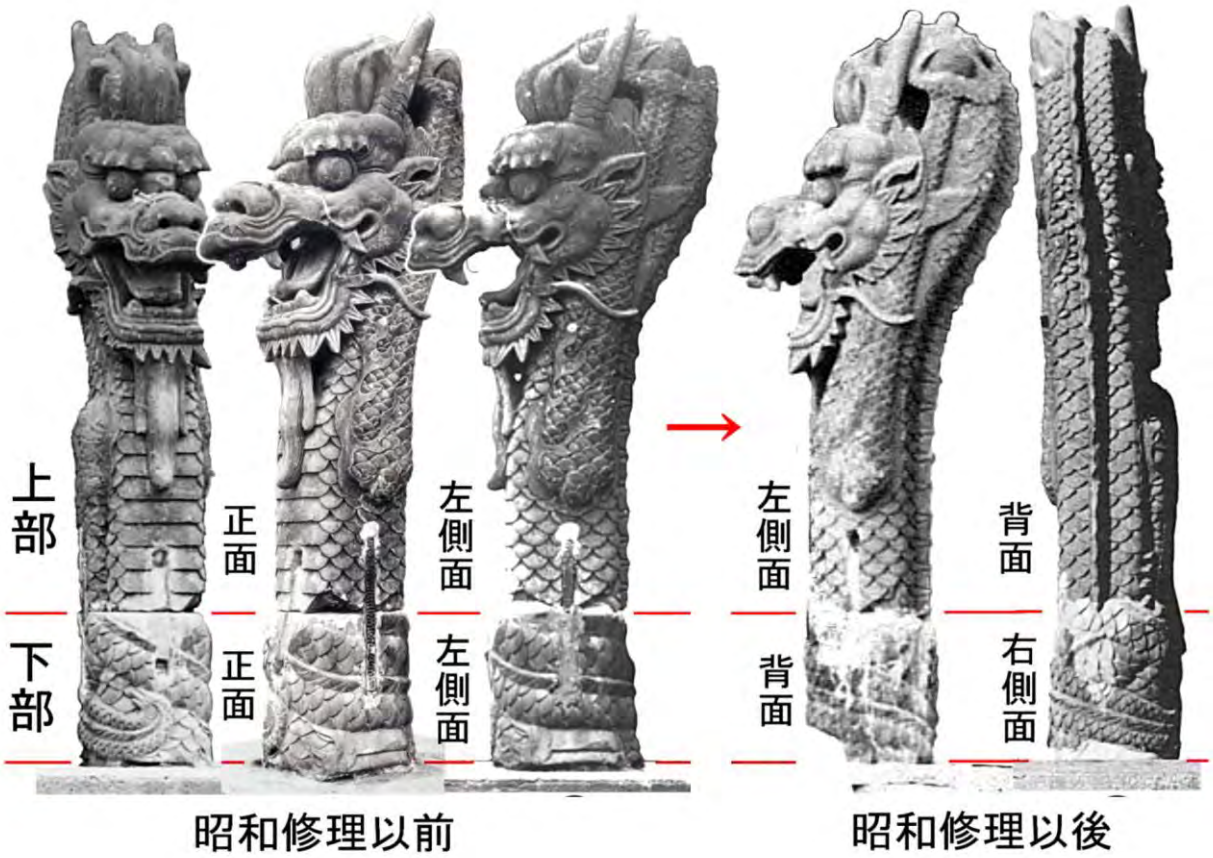

図4：昭和修理以前と以後の大龍柱の変化

昭和修理以後、大龍柱の背面側が御庭側に面することになった。安里 2022「ホゾ穴と正面向き」(「琉球新報」2022 年 6 月 1 日付け）より

4）昭和修理後の古写真と３Ｄ遺物合成画像の重ね

・**図５**は、昭和修理以後の大龍柱阿形画像に、３Ｄ合成画像を重ねたものである。

・**図２**では、大龍柱が切断・短縮される以前の大龍柱の全体像に遺物の３Ｄ画像を重ねたが、**図５**では、昭和修理以後*の大龍柱画像に３Ｄ合成画像を重ねた。

＊正確には昭和修理中の写真で、大龍柱は回転しているが上部と下部を固定するためのカスガイがまだ打ち込まれていない。

・**図５**の３Ｄ合成画像は、戦前は一個体だった③⑤⑥の上部と下部（トグロ巻部）の⑦をホゾ組と銅製カスガイで固定した状態で接合したものである。

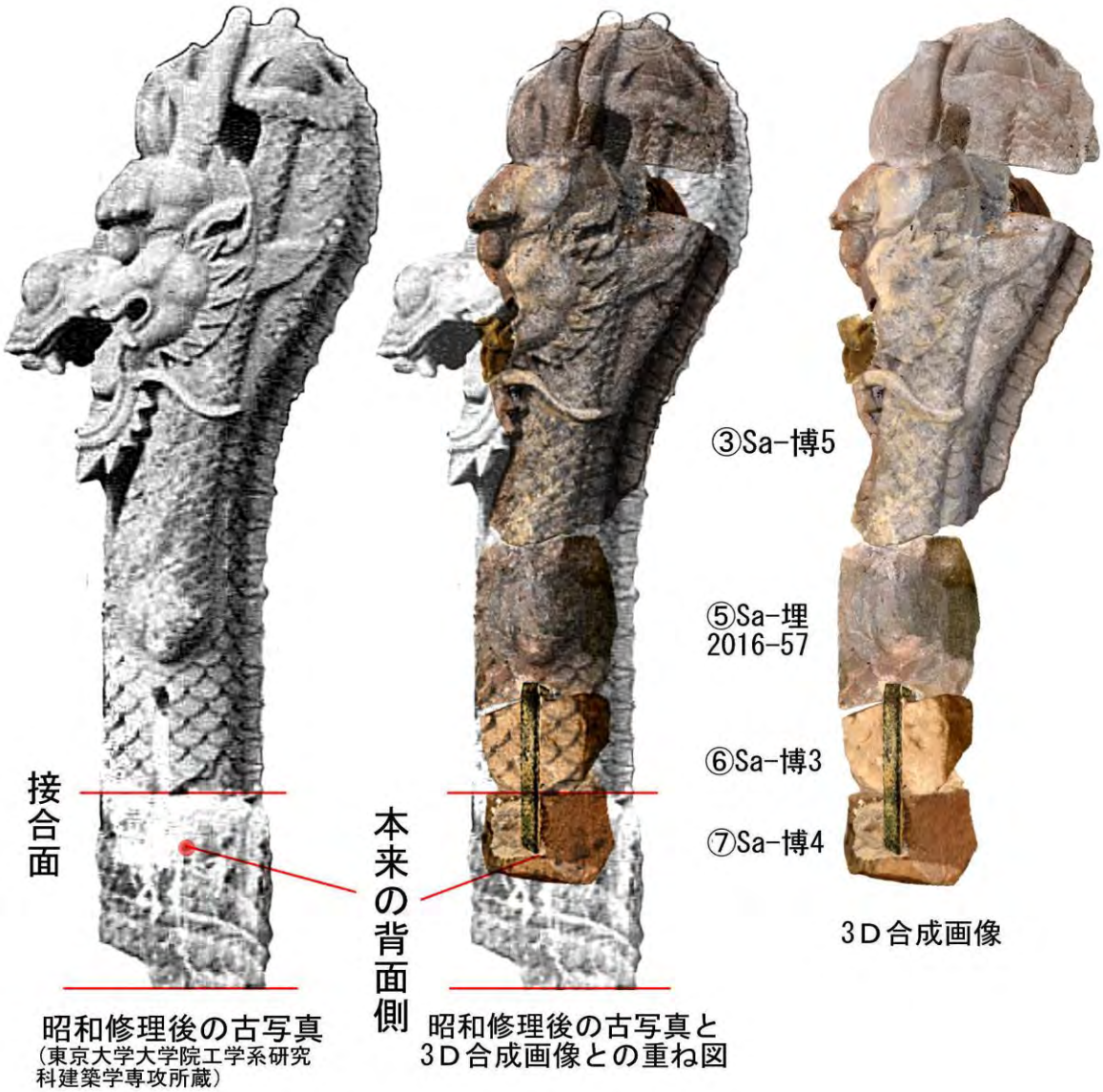

図５：昭和修理後の阿形写真と遺物３Ｄ合成の重ね図

・**図６**は、⑤⑥と⑦の接合状態の３Ｄ画像である。３Ｄ透過画像で、⑥のホゾ穴に⑦のホゾを嵌め、外側から銅製カスガイで固定していた状態がよく分かる。
・このホゾ組は、明治期に大龍柱を切断・短縮した際に、新たに上部（胴部）と下部（トグロ巻部）に一辺７㎝程のホゾ穴とホゾを削り出して接合した時のものである。

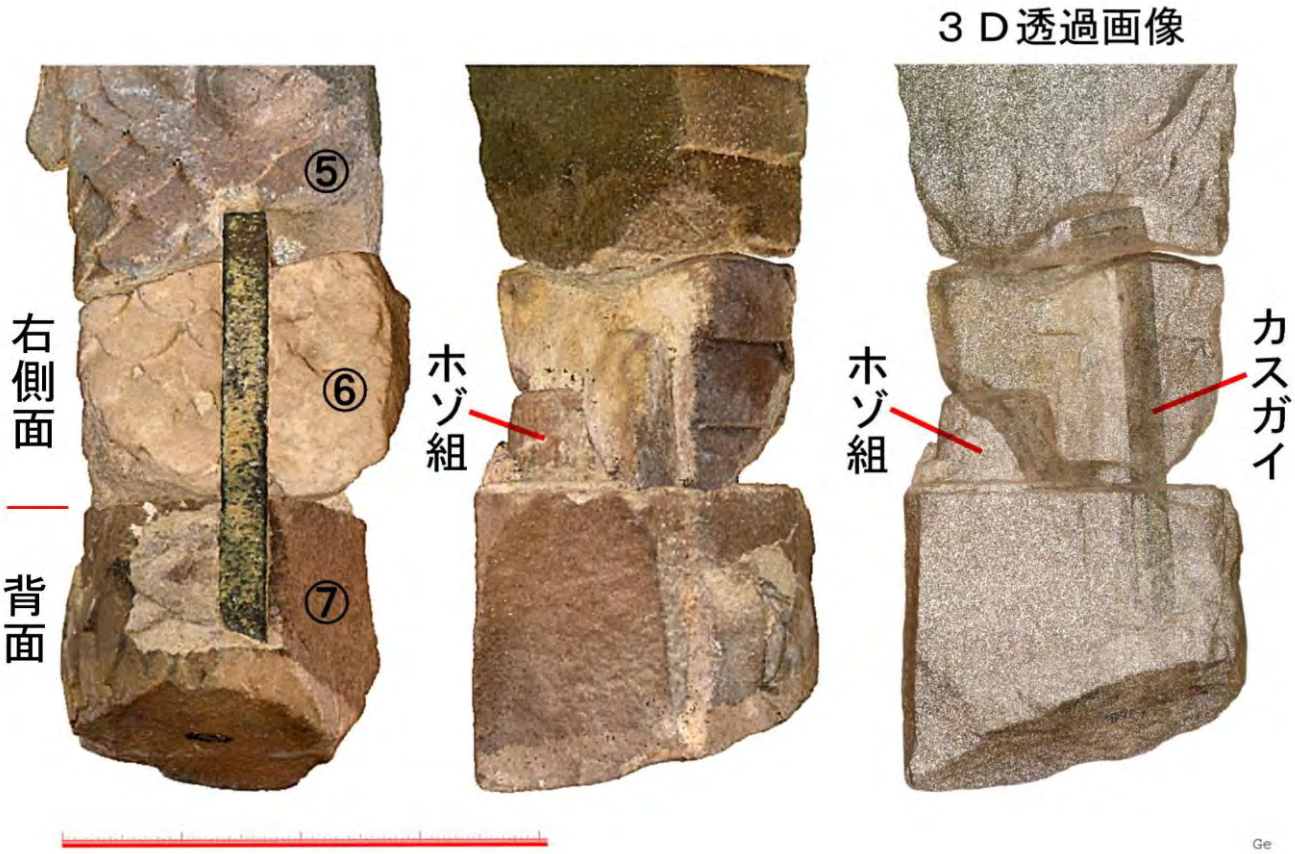

図６：⑤Sa-埋 2016-57・⑥Sa-博３・⑦Sa-博４のホゾ組とカスガイによる接合状態

5）トグロ巻部背面遺物のホゾ穴・無彫刻面の検討

・以上の分析で銅製カスガイが付いた⑦Sa-博 4 が、阿形大龍柱の背面側遺物であることを確認した。平成の大龍柱復元以来、大龍柱の背面を撮影した写真はないとされてきたが、その写真も遺物も存在していたのである。では、⑦Sa-博 4 に、石階段欄干と連結した形跡はあるのか？

・まず、大龍柱が正面向きで、石階段欄干と連結していた古い大龍柱（Sc-博 6）の連結部分を見ておきたい。Sc-博 6 の欄干連結部分にあたるトグロ巻部の背面は、ホゾ穴が断面四角形に彫られ、ホゾ穴がない部分は無彫刻の平坦面にして欄干耳石と密着するように加工されている（**図 7**、第１回報告会の安里報告資料Ⅲ-３参照）。

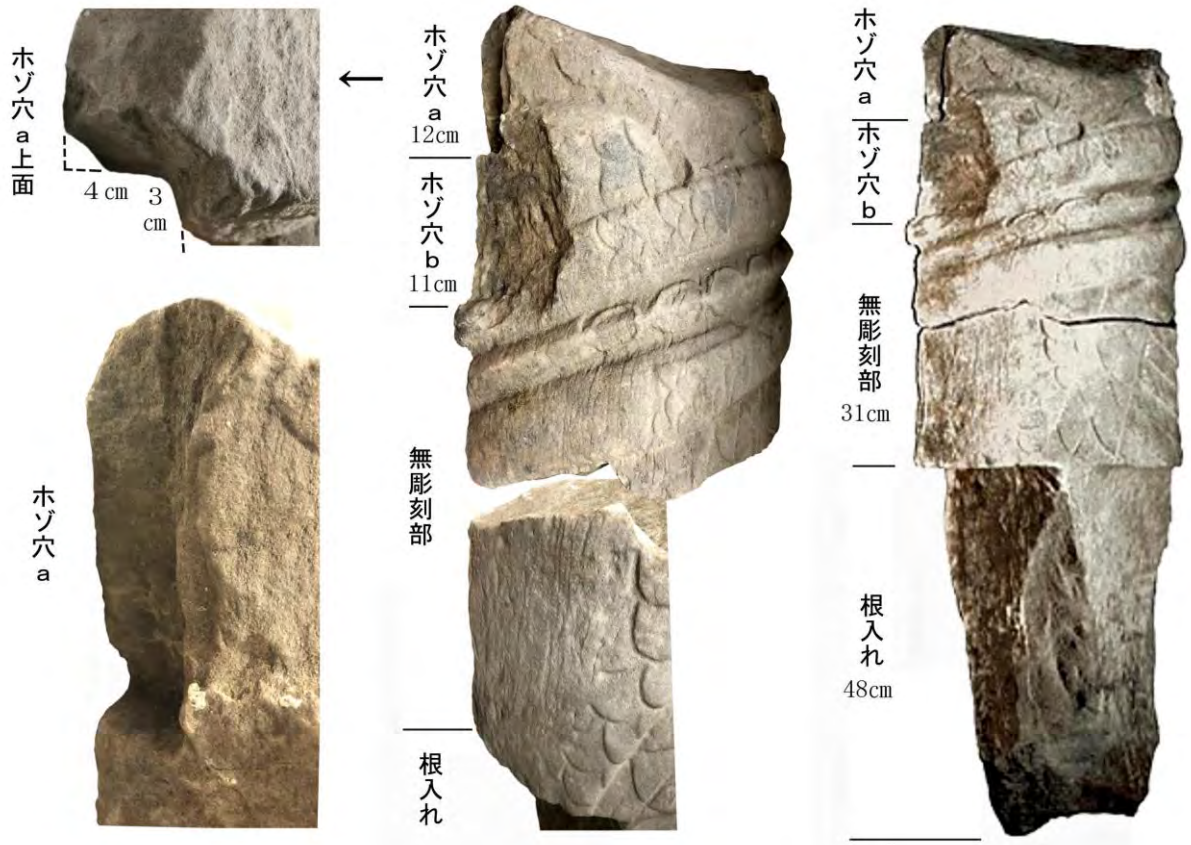

図 7 ：Sc-博 6 背面で欄干接続面に加工したホゾ穴と無彫刻面

・Sc-博 6 の欄干との連結面の加工状態と⑦Sa-博 4 のトグロ巻き部分の背面を比較しよう。
・**図 8** は、⑦Sa-博 4 の側面と上面画像である。背面は、カスガイを打ち込んだ部分が大きく欠損していて石灰で補修している。
・上面画像には欠損部分の断面が表れているが、破損した断面であって人為的に加工したホゾ穴の断面には見えない。
・また、欠損部分のまわりの背面にはウロコの彫刻があり、無彫刻面になっていないい。

・Sc-博 6 の欄干連結面の状態とは全く異なっており、⑦Sa-博 4 の背面が欄干と連結していた形跡は全く見られない。
・Sa-博 4 の背面状態から、戦前大龍柱がかつては石階段欄干と背面で連結して正面を向いていたという証拠を得ることはできなかった。

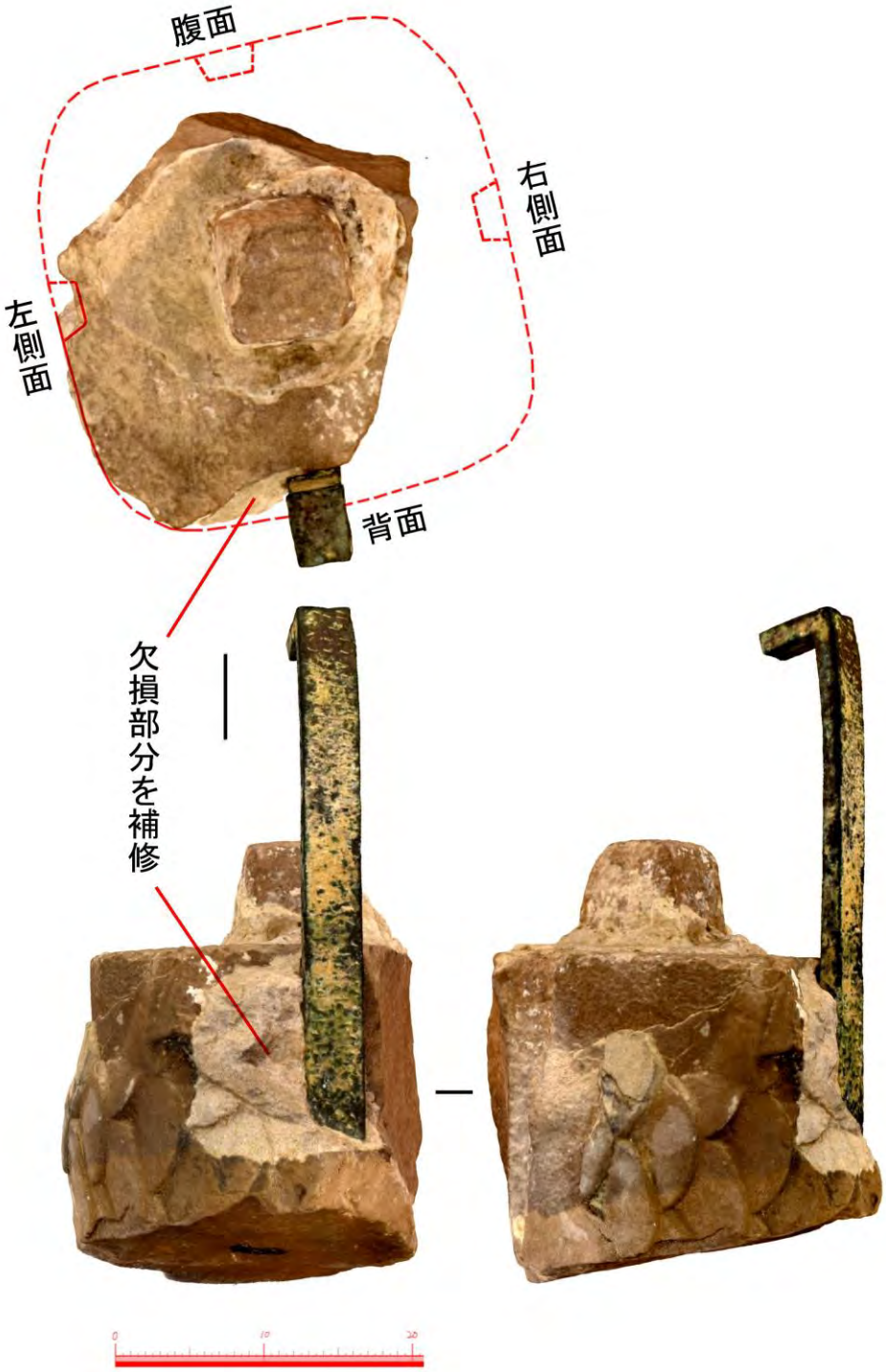

図 8：⑦Sa-博 4 の側面図・上面図